

『地域に支えられた「いきいき市民講座」の 10 年』

下関ロータリー・クラブ卓話
於：下関シーモール・パレス

「いきいきモニター会議」

顧問 大隈 暉

2007 年 4 月 「いきいき市民講座」第 1～2 回收録、5～6 月放映
（番組放映時間一回 1 時間、実質 55 分）
2014 年 10 月 下関市立中央図書館安富静夫館長より DVD 寄贈要請あり
2015 年 4 月 番組放映時間一回 30 分、実質 27 分に短縮（第 190 回以降）
2015 年 9 月 「いきいき市民講座」第 200 回放映
2015 年 10 月 DVD 200 本（第 1～200 回）を下関市へ寄贈：
贈呈式 2007 年 10 月 6 日（月）下関市本庁舎 中尾友昭市長
2016 年 2 月 下関市立中央図書館 4F「いきいき市民講座」DVD 特設コーナー
公開。館内閲覧開始。
2017 年 3 月 「いきいき市民講座」第 236 回（最終放映）を以って終了（満 10 年）
「いきいきモニター会議」清算管理団体として継続
2017 年 5 月 「いきいき市民講座」第 201～236 回 DVD 36 本を追加贈呈
2017 年 6 月 下関市立中央図書館 4F 特設コーナーにて全 DVD 館内閲覧開始

本日は、伝統ある下関ロータリークラブにお招き下さり、卓話の機会を頂きました。ありがとうございます。ご紹介頂いた大隈でございます。限られた時間の中ですが、J：COM 下関のケーブル・ネットデジタル 12ch で放映されて来ました「いきいき市民講座」のお話をさせていただきます。

この番組制作の中で、先程ご紹介頂いた「いきいきモニター会議」は、番組企画、出演交渉を分担するボランティアの任意団体として、活動して参りました。お手許配付の資料を、ご覧いただきながら、お聞き頂けると幸いです。

J：COM 下関様と連携したこの番組は、2007 年 5 月に放映開始し、本年（2007 年）3 月の放映を以って、満 10 年の活動に幕を降ろしました。

下関ロータリークラブ・メンバーの中からも、多くの方々にご出演、ご関係を頂いていることを知り、今更ながら、驚いている次第です。長い間この番組をご視聴頂き、ご支援、ご協力頂きましたことに、改めて感謝とお礼を申し上げます。

お陰様で、10年間の制作本数合計は、236本に達し、2015年10月と本年5月の2回に分けて、全てのDVDを下関市立中央図書館へ寄贈させて頂きました。この中には、先月7月18日、105歳でお亡くなりになった日野原重明先生ご出演の貴重なDVD2本が入っております。山口出身のご縁で、番組にご協力頂く光栄に浴しました。お手許配付資料の2頁をご覧ください。

このような次第で、本日は、番組企画、出演交渉を担当しました「いきいきモニター会議」を通じた私共の活動を中心にお話をさせて頂きます。今後は、この会場から直ぐ近くの下関市生涯学習プラザ“ドリームシップ”(DREAMSHIP)にある下関市立中央図書館4階の受付正面に設置された「いきいき市民講座」特設コーナーのDVDをご利用下さり、多くの市民の皆様方にご活用頂けることを願っている次第です。このコーナーは、夜8時までご利用が可能ですから、下関ロータリークラブのメンバーの皆様にも是非一度ご覧願いたく、併せPRもして頂けると大変光栄に存じます。お手許の配付資料1頁下の特設コーナーの写真や2頁以下の新聞記事をご覧ください。

1. 2007年「いきいきモニター会議」設立

ところで、お手許配付資料1頁の一番右上にある絵図「トライアングルのボランティア組織」をご覧ください。ご覧のように番組を制作する関係者が、全て独立したボランティア活動から成り立っているのが、このプロジェクト最大の特徴でした。全てが、“スポンサーなし”の無償奉仕と云うことです。そして、スタートの当初から下関市教育委員会の後援(名称後援)を頂いたことが公共性と信頼性を高める上で力強い援護になりました。

1) J:COM下関と5大学の協力

振り返りますと、それは、私の東亜大学時代に遡ります。少子化時代の到来を目の当たりにして、大学の活性化策を模索していた頃になります。いくつかのアイデアが生まれましたが、その一つが、大学と実社会との双方向接点の拡大を目指した「バーチャル・ユニバーシティ」構想でした。キャンパスを必要としない(仮想の)大学と云う意味です。これを、TVチャンネルを通じて実現したいと考えました。

地元財界OB(山口銀行)の方々と一緒に、当時のJ:COM下関社長にプロジェクトのアイデアを持ち出したのが、2006年秋のことでした。これが「いきいき市民講座」の実現につながりました。

当初は、私共の唐突な提案に、当惑されましたが、幸いにも、全国のJ:COMグループ挙げて、高齢者(エルダー)層対象の社会貢献事業(CSR)を展開する経営方針を打ち出したタイミングと重なりました。このきっかけが大きかったと云えます。取りも直さず、J:COM下関と協働して、2007年春の番組開始に向けて奔走することになりました。第1回の収録は同年4月、放映は5月。ここから、月2本、1時間(実質55分)番組の制作活動がスタートしました。

本格活動するためには、それなりの組織が求められました。「いきいき市民講座」の番組企画を担当する「いきいきモニター会議」が正式に誕生したのは、放映開始直後の 2007 年 6 月でした。定款を定めた任意団体としてのスタートです。発起人には地元財界OBや下関 5 大学の先生方、そして地域有識者の皆さんに幅広く参画願いました。モニター会議を構成するメンバー層の厚みが番組企画に当たって出演者の人選と番組立案に大変な力を発揮しました。

当初は、いつまで継続できるのか本当に心配でした。しかし、スタートして見ますと次第に支持層が広がって行くのが目に見えて分かり、関門海峡を挟んだ地域社会の力（ちから）である“**地元力**”の有難さを強く感じました。（東京や大阪など）**他地域からの借り物でない“地元力”の発揮こそが 10 年もの長い間続いた原動力になったと確信しています。**このようにして、出演者を含め関係者全員がボランティア参加によって構成される全国的ユニークな仕組みが誕生しました。それが、お手許資料の 1 頁の絵図の仕組みです。私企業としての J : COM 下関様が、かかる社会貢献事業に踏み切った英断にも本当に頭がさがりました。

2) 大学の使命：研究、教育、**社会貢献**

ところで、企業や大学の社会貢献とは何か。企業にとっては、メセナとか、利益の一定割合を社会還元するとか、既にそれなりの歴史がありました。しかし、大学にとっては大きな模索になりました。一人大学だけでなく、地域社会と一緒に考えなければならない大きなテーマでした。

それまで、大学の使命は「研究」と「教育」にあると云われて長い年月が経っていました。確かに教育を通じて行われる人材の育成は大学使命の大きな柱です。「知の集団」として、大学の研究成果を世に送り出すことも大きな使命であり続けました。しかし、大学があたかも社会とかけ離れた別世界のように云われた「象牙の塔」時代は既に大昔のことであり、最早、この言葉は死語になっていました。

大学に人が集まるだけでなく、大学自身が積極的に社会に出向いて貢献することが強く求められる時代に変化して来ました。それでも、この変化は比較的最近であります。「社会貢献」を強く意識し、直面する大きな課題であると真剣に考え始めたのは、少子高齢化が進み、いよいよ大学経営の氷河期が到来する 21 世紀初頭のことになります。文科省が大学の持つ使命の 3 本目の柱として「社会貢献」を加えました。

私はこれを「**出掛ける社会貢献**」と称しています。大学の持つ社会貢献とは、その力を“**実社会で活かす**”ことにあります。そして、**大学と社会の双方向の交流を拡大すること、ここに社会貢献の意義が生まれて来ます。**

このように考えますと、私共の「いきいきモニター会議」が、J : COM 下関と連携制作した「い

きいき市民講座」は、時代の要請でもあった大学の社会貢献を具体化する大きなツールであり、その実験場であったと云えます。

この市民講座を広く社会に開放して、願わくば、T V画面の中に生まれる「ヴァーチャル・キャンパス」、「ヴァーチャル・ユニヴァーシティ」の実現をも期待しました。大学を知ってもらために、オープン・キャンパスや大学祭の番組も積極的に企画しました。T Vと云う「コモン・ツール」（共通基盤）を通じて、“下関 5 大学が連携する発想”こそが、地域大学の真の地域貢献につながり、大学の活性化と生き残りにつながると考えた訳です。このこともあって、最初の 5 年間は、下関 5 大学の先生方のご出演が圧倒的に大きい主役の座を占めました。

これが呼び水になって、地域の皆さんとの双方向交流が拡大し、地域共感、地域共鳴の輪が大きく拡大しました。後半の 5 年間は、地域社会の皆さんのご出演が大幅に増加し、大学関係者の出演数を凌駕したことは、このことを端的に物語っています。双方向から交流する「ヴァーチャル・キャンパス」の実現でした。

2. 関係者が全員ボランティア

もう一度、お手許配付資料の一番右上にある「トライアングルのボランティア組織」の絵図をご覧ください。出演者を含め、関係者の全員がボランティア参加であることが地域共感、地域共鳴の輪を拡大し、そこに社会貢献の意義を確かなものとして見出すことになります。活動を更に拡大する手段として、一時は、スポンサーを検討したこともありましたが、

しかし、特定のスポンサーのいなかったことが、却って中立性と公共性を高め、そのことが 1) 参加者の拡大と 2) 地域社会の理解と支援拡大につながりました。その意味で、**地域社会こそが、最大のスポンサーであり、10年と云う継続性につながったと、思いを新たにしております。**

3. 下関市立中央図書館への寄贈

1) 降って湧いた寄贈依頼

2015年10月に、それまで「いきいきモニター会議」のメンバーを通じてご縁のあった下関市立中央図書館の安富館長から、突然降って湧いたような寄贈依頼が舞い込んで来ました。もともと、図書館への寄贈等は全く考えておらず、地域貢献に資する番組制作に向けて、或る意味、がむしやりに走ってきた私共にとって、このお話は、正に晴天の霹靂でした。

しかし、「いきいきモニター会議」メンバーや関係者と協議し、少し立ち止まって考えているうちに、「これは大変なことになったぞ」、「望んで実現出来ることではない」などの思いが、次第に湧きおこって来ました。それからが大変でした。もともと寄贈の準備などは一切できておらず、必死になってデータベースを作成し、オンリーワンのDVDレーベル写真を整備、印刷しました。

完成したのが、2016年9月でした。それまでに放映した第1回から第200回までのDVDを、2016年10月はじめに、下関市長立会のもと、贈呈式を行うことが出来ました。そして、第201回から最終回236回までの寄贈を全て完了したのが、2017年5月下旬でした。追加分贈呈式の写真は1頁の下部に、そしてDVDのサンプルは2頁中ほどの写真の通りです。

2) DVD特設コーナー：休館日あり。開館日は20：00まで閲覧可能。

寄贈されたDVDは、下関市立中央図書館様のご好意により、図書館4階の正面受付に、特設コーナーを設けて頂き、既に236回分全ての館内閲覧が可能になっています。冒頭に述べましたように、休館日を除き、4Fでは夜8時までの閲覧が可能であり、同じ階にあるDVD再生ブースで美しい画面をお楽しみ頂けます。

唯、長いもので1本1時間（第1回～第189回）、短いもので1本30分（第190回～第236回）の閲覧時間が掛かりますので、午後7時位までにお借り入れされることをお勧め致します。なお、5階での閲覧時間は夜9時までになっていますが、DVD再生ブースがありません。

4. 地域に支えられた10年

1) 全国でも稀有のボランティア組織

ご説明したように、プロジェクトの特徴は、出演者はじめ、番組企画担当「いきいきモニター会議」、撮影、ネット・ワーク放映担当のJ：COM下関等の関係者全員がボランティア参加の無償奉仕で成り立っていることです。これに下関市教育委員会の後援が加わりました。調べましたが、このような事例は、全国的にも稀有のものではないかと考えております。

そして、**最大の特徴こそ、「スポンサーが地域社会」であったと云うことです。**ささやかながら、新しい型の地域貢献、地域活性化の“プロジェクト・モデル”（ビジネス・モデル）になったのではないかと、少しばかり誇りに思えるようになりました。是非、このような形式の地域活性化手法が全国的にも波及することを期待して止みません。

2) 地域の文化財、地域の財産

下関市立中央図書館安富静夫館長からは、この市民講座は「貴重な地域の文化」であり、「貴重な地域の財産」である・・・との有難いお言葉を頂きました。

地元力によって、地域の文化を発掘し、これを大切に引き継ぐこと、これこそまさに「文化の継承」につながると考えられます。明治維新时期に活躍された長州人の数々、北前船で繁栄した下関の話題はもとより、長門本「平家物語」（重要文化財）の権威者宮田尚先生（梅光学院大名誉教授）のお話（第170回）と云い、一子相伝の銘菓「阿わ雪」の継承者松琴堂の西原由美さんのお話（第180回）と云い、出演者一人一人の講座内容を、ひもといてみますと、それぞれ

にその人以外では語れない特徴ある話で見事に構成されています。これらは、全て後世に引き継がれる必要のある地域文化であり、日本文化でもあります。出演者一人一人の講座が貴重な地域の財産を形成していることとなります。

このように考えますと、下関市立中央図書館と云う公的機関の中で、大切に保管され継承されることの意義が、ひしひしと感じられ、出演者一人一人のお気持ちを大切に保管し継承することの重みを実感致します。改めて感謝と御礼を申し上げたい気持ちでいっぱいになります。

5. 「いきいきモニター会議」：今後の役割

1) DVDの保護・管理（アフタ・ケア、著作権）

先程、触れましたように、「いきいきモニター会議」は、本年（2017年）3月末をもって番組の企画活動を停止しました。4月以降は、清算管理の任意団体として同名のまま継続することになりました。その大きな目的は、この貴重な地域文化、地域の貴重な財産となる「いきいき市民講座」DVDの保護・管理を、図書館やご関係の皆さんとご一緒に、お手伝いさせて頂くことにあります。

2) 無償の貢献

そして、無償の貢献から出来上がったこれらの制作番組とそのコピーであるDVDの法的権利を、著作権等関連する法律の枠内で維持し、保護するお手伝いをするににあります。

著作権そのものは、活動開始の当初から「いきいきモニター会議」定款の中で、J：COM下関様にその権利の譲渡をすることを定めていますが、第三者が有償行為や関連する営利行為等によって出演者の名誉や権利が侵害される事態が発生した際は、当事者や関係者が協力して、この解決にあたらうとするものです。

もともと、「いきいきモニター会議」は、制作する番組内容に対し、視聴者からご意見、ご批判が出た場合は、責任をもってこれに対処する役割を担ってきました。数は少ないものの、現実にもそのような事例が発生し、関係者と協力しながら、出演者の無償の貢献を保護する役割を果たして来ました。

今後も、このような問題が発生した場合にこれに対処する組織として継続することを定めています。お手許配付資料1頁右側の倫理規定や著作権、肖像権の絵図はこれを指したものであります。本日、ご列席の皆様方におかれても、このような清算管理任意団体である「いきいきモニター会議」継続の趣旨をご理解頂き、引き続きご協力頂けると大変光栄に存じます。

なお、「いきいきモニター会議」のこれまでの活動と今後については、お手許配付資料の3頁記載のホーム・ページ（HP）を使って広報活動を行う予定にしております。お気づきの場合は、クリックして閲覧して頂けると有難く存じます。

6. 終わりに

そろそろ、時間が迫って参りました。締めくくりをさせていただきます。「いきいきモニター会議」の活動は、ささやかな地域貢献の一つではありますが、「継続は力なり」との言葉もあります。10年の歳月は、それなりに地域活性化への呼び水となり、大学と地域社会を結び付ける接着剤の役割を果たすことが出来たのではないかと考えています。

当初は、大学から発信する地域への呼びかけの形でスタートしましたが、気がつけば、地域の人々が大学に呼びかけているようになりました。これが地域社会と双方向の交流を行う大学の在り方にもつながりました。大学の活性化は地域の活性化につながると確信しています。それは若者がいるからです。若者のいる街は活性化します。年齢を越え、階層を越えた交流の渦を巻き起こします。

そして、出演者の一人ひとりが、地域に足場をもった大きな役者であり、この力（ちから）が結集した**“地元力”**が、地域を支えていることに気づかされます。これが、「地域共感」、「地域共鳴」の輪を拡大させました。

改めて、下関市立中央図書館安富静夫館長の言葉をお借りしますと、この「いきいき市民講座」が「貴重な地域の文化」であり「地域の貴重な財産」になっていることも事実ではないかと思えて来ました。今では、これを保護し、後世に継承することが、大きな使命の一つだと感じております。

ご清聴ありがとうございました。

以上